

2015年7月25日

公開セミナー「子どもの貧困の解決策を考える」

子どもの自己肯定感をはぐくむ支援

「生い立ちの整理」を手がかりに

同志社大学大学院 田中 弘美
同志社大学社会学部 埋橋 孝文

報告の流れ

- ・ 研究背景
- ・ 自己肯定感と生き立ちの整理
- ・ 調査の概要
- ・ 結果
 1. なぜ生き立ちの整理は重要か？
 2. 施設職員の役割とは？
- ・ 考察
 1. 自己肯定感向上のための2つのスタートライン
 2. 一人一人の子どもの人生に寄り添う支援
- ・ まとめ

研究背景

- ・ 貧困の防御促進要因としての自己肯定感(阿部, 近刊)
- ・ 「良好な親子関係」と「児童養護施設の子ども」

家庭環境に不利をかかえた子どもの自己肯定感はいかにして回復・向上させることができる？

自己肯定感の重要性

- ・ 「精神的レジリエンス」(林, 2013)
- ・ 「主体性型の自立」(大村, 2014)

これらの根幹に位置づけられる自己肯定感

自己肯定感の向上の契機



(小田川, 近刊; 林, 2004)

生い立ちの整理

- ・ 子どもが「過去を取り戻し、現在を理解・納得し、未来に生きる力を得る」ための支援(永野, 2012)

≡ 真実告知、ライフストーリーワーク(LSW)

調査の概要

- ・ 対象：質問紙調査（2013年1～3月）でインタビュー調査に協力可能と回答した児童養護施設23ヶ所
- ・ 期間：2013年5～8月
- ・ 実施時間：各施設約1時間
- ・ 分析対象：生い立ちの整理に言及した12施設
- ・ 倫理的配慮：同志社大学倫理審査委員会の承認

なぜ生い立ちの整理は重要か？

- 結果 1 -

1) 子どもが自己否定に陥ることを回避する

- ▶入所の時点で「なぜ施設に入るか」を確認しています。特に虐待が原因の場合は「あなたのせいではない」ということを何度も話して、それでも来てから「自分が言うことを聞かなかったから虐待された」という言い方になるので、「それはあなたが自分を守る手段だったよね」と面接で話したりします。
- ▶子どもたちの特徴としては「自分が悪かったから入ったのではないか？」と、親御さんと生活できないことに対しての負い目をもっている子どもが大半です。その中で自尊心とか自己肯定感はもちにくい環境があるということですね。

2) 親との関係性を子ども自身に構築させる

- ▶ 生い立ちの整理をしたことによって、子どもが吹っ切れるというか、覚悟を決めるというか。
- ▶ 去年、お父さんのほうから本当のことを手紙で書いてきて、ショックだったみたいで。職員と一緒に刑務所まで面会に行って、それで腹がくれたという。
- ▶ お母さんにしてもらいたい、愛されたいというのがあるから。求めても求めても、欲しているようには来ないじゃないですか。それで粘る、諦めきれない。そうじゃなくて、自分が変わっていくことで踏ん切りをつけていく。そこを超えると精神的自立ですよ。

2) 親との関係性を子ども自身に構築させる

▶ やっぱ親子関係って切れない部分もあるから、単純に「そこを割り切って親子関係を切りなさい」というわけにはいかないです。子どもも、頼られることもわかったうえで関わりを求めたりということもあるから。ただ、そこで見限るか、また関わりを持つかというのは、ある程度は本人の意思かなと思いますね。

▶ 虐待を受けて帰るところがないはずなのに「お金を稼いでお母さんに謝ったら許してくれるかな」と、とんでもないことを言う。入所理由をちゃんとわかってない子は、高校生になっても「そうやってお母さん許してくれて一緒に住んでくれるかもしれない」と簡単に口にする子もいて。

3) 子どもの権利擁護の視点

▶知る権利は子どもにあるので、それは私たち受け止め側の視点であって、本人でないとはわからない。本人が判断すべきことですので。逆に、自分たちは言わない、隠すことのほうが子どもにとってものすごく失礼だなあと私は思います。子どもの人生なのに、その子の人生を自分たちは知っているのに、黙ったり隠したりとか、自分たちはそういう権限は持っていないと思うので、子どもが知りたいことに関しては、まずは知りたいと思っている部分については、きちんと答えてあげるべきだと思います。

職員の役割とは？

- 結果 2 -

1)子どもとの信頼関係の構築

▶生い立ちの整理でお題目のように「私たちは君たちのことをすごく大事なんです」と言っても、「俺たちがそう思わないと意味がねえ」って言われて、「その通りだよね」と。それはすごく勉強になって。子どもにも言うんですけど、「だから教えてほしい」って。「あなたたちがどういう時に、そう思うの？」って。

1) 職員のスキル・姿勢

▶小学校5年生の時に、すごく出来のいい子で、もちろん学校はうまくやっている子が、わーっと泣き出して。不意打ちで友達に「お前の親、何をしてるの？」って聞かれて、自分は「はっ」と、「俺の親どうしているだろう」と思ったらびっくりした。驚いたことによって帰ってきた時に表情が悪くて、職員が「知りたいの？」と聞いたら「うん」って。そのときに職員はよく気がついてくれたな、と。その子のしんどさに気づいてくれて、それをちゃんとつないでくれて、それをよかったなあと思いました。

1) 職員のスキル・姿勢

▶職員にも「今年度から覚悟を決めて生い立ちの整理をやるか」と。それをやるには職員が相当メンタルが強くないと。一緒に振り回されて落ち込んでいるとだめで、元気づけていかないといけないので、職員も相当覚悟がいる。一生抱えていくことなので。うちの職員にも伸びてもらわないといけないので、子どもだけでなく。

自己肯定感向上のための 2つのスタートライン

- 考察 1 -

1) 自己の存在を肯定するための スタートライン

- ・ 自己否定の思考を断ち切る
- ・ 存在レベルでの自己の受容

2) 自分の人生を自分に取り戻すための スタートライン

- ・ 親との関係性を子ども自身が(再)構築する過程
- ・ 過去を受け止め、納得し、次のステージへ踏み出す

一人一人の子どもの人生に 寄り添う支援

- 考察 2 -

職員の役割

- ・ 相当なスキル・覚悟を要する支援
- ・ 個別的・長期的ななかかわりを要する支援

まとめ

- ・ 自己肯定感の向上にかかわる2つのスタートライン
 1. 自己の存在を肯定するためのスタートライン
 2. 自分の人生を自分に取り戻すためのスタートライン
- ・ 信頼できる職員による個別的・長期的な支援

今後の課題

- ・ 生い立ちの整理を実施するために不可欠な環境はどのようなものか？ — 勤務体制、訓練 etc
- ・ 生い立ちの整理がうまくいくための条件はどのようなものか？ — 子ども側の条件、家庭との関係 etc

fin

ご静聴ありがとうございました